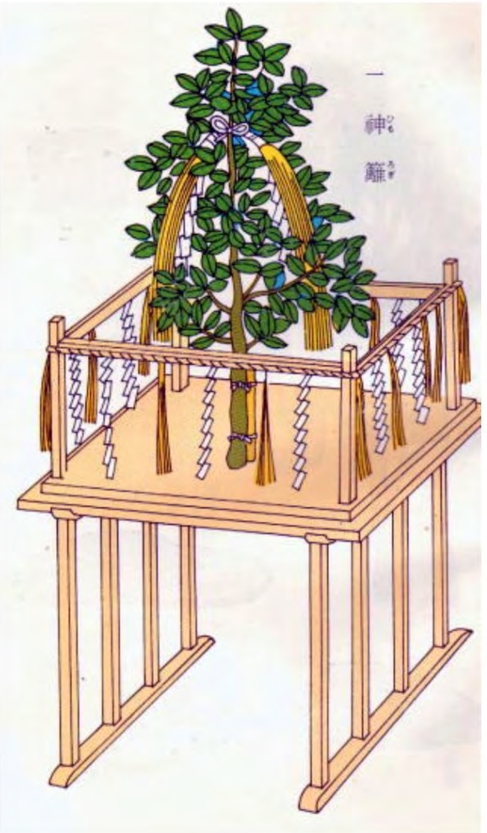
棲む

建築と自然の歴史的関係



□神籬（ヒモロギ）

ヒ＝神

モロ=森(=山、天下る「あもる」)

ギ＝木

を指す、神霊が天下る木、神の依代(よりしろ)となる木の意。漢字の「籬」は垣根のことである。ユウとシデを取り付けた榊（サカキ）が配される。いわゆる移動式の祭壇で、神社社殿の原型とされる。

・元来は岩座や岩境を取り囲む神域を作る配石群　(ex.ストーンヘンジ)

・岩座は後年の亀島、岩境は後年の鶴島の原型

□三輪山　垂直降下系　太陽信仰と磐座（イワクラ）

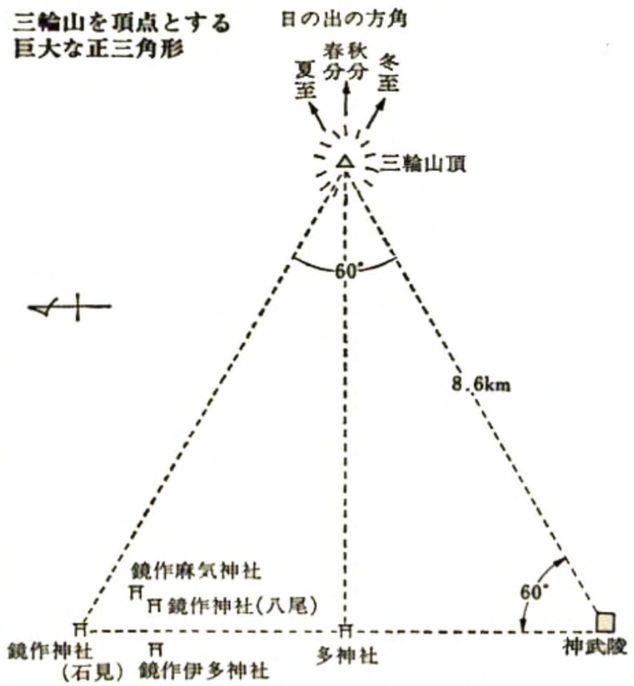
「平城京」の守護神となっていたのが三輪山

太陽が昇ってくる位置にある『三輪山』は、奈良盆地から見える山の中でも、特に形の整った円錐型を示していることで知られ、この山の麓に『大神神社(おおみわじんじゃ）』が鎮座する。

一般的に神社は、神の鎮まる「本殿」と、それを拝む「拝殿」から構成されるが、大神神社の場合、「拝殿」だけがあり、「本殿」がない。大神神社の「本殿」は『三輪山そのもの』であり、三輪山が『神の鎮まる場所』なので、本殿が作られなかったとされ、こうした自然崇拝が、神社の原点だとされる。

その「磐座」は、標高約140mの三輪山麓に位置し、現在「山ノ神祭祀遺跡」として知られている。三輪山の磐座も、作られたのは古墳時代より以前、かなり古い時期で、これが代々、土地の人々の祭祀施設として転用されていったものとみられている。「三輪山」の近くには、「神武天皇古墳」と「鏡作（かがみつくり）神社」があり、この３地点を結ぶと、一辺、約8.6㎞の正三角形『△』が、地図上に描ける。

多神社からは、春分秋分の時期に、三輪山の頂上から登る太陽が拝め、太陽信仰という三世紀半ばの自然信仰の代表的な遺構なのである。



「増補　大和の原像　知られざる古代太陽の道」
小川光三　学生社　より抜粋

■宗像大社　配置図

■宗像大社　本殿

■薦神社　三角池

□宗像大社（応神～）　垂直降下系　祖神を祀る水平渡来系神池の源流

天照大神の三柱の御子神、沖ノ島の沖津宮に田心姫神（たごりひめのかみ）、大島の中津宮は湍津姫神（たぎつひめのかみ）、田島の辺津宮に市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）を祀る。この三宮を総称して宗像大社と呼ぶ。

中国大陸や朝鮮半島に最も近く、外国との貿易や進んだ文化を受け入れる窓口であった。「日本書紀」にも、神勅（天照大神のお言葉）により、三女神がこの宗像の地に降り、祀られたことが記されている。 特に沖ノ島は、九州と朝鮮半島とを結ぶ玄界灘のほぼ中央にある女人禁制の神の島、「海の正倉院」ともいわれる。こうした大和朝廷による磐座祭祀以前には、北九州海人集団による海上祭祀が行われていたと考えられている。

玄界灘に浮かぶこの島の彼方から、渡来した祖先が目にしていたであろう景色を写し取ったものが、池泉式庭園の原型とされる。

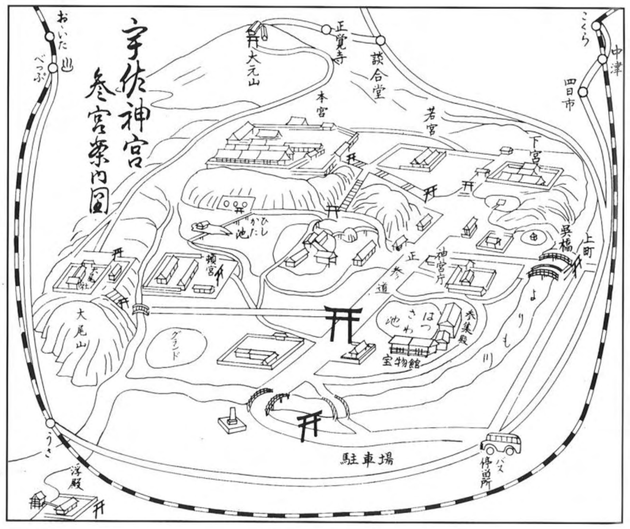
□薦神社（こもじんじゃ：834～）　水平渡来系　合祀以前の形式

大分県中津市に所在する八幡宮で、別名大貞八幡宮（おおさだはちまんぐう）とも称される。全国八幡宮の総本宮「宇佐神宮」の祖宮といわれ、承和年間834～48年に創建の由緒ある古社。池は三角池（みすみいけ、御澄池とも表記）と呼ばれ、池そのものが御神体で、もとは本殿がなかった。現在のものは江戸末期の創建。

□宇佐神宮（571～）　水平渡来系　池泉式庭園の原型　神仏習合という偶像崇拝

全国四万四千社といわれる八幡社の総社。宇佐神宮は三つの巨石を比売大神の顕現として祀る御許山山頂の奥宮・大元（おおもと）（＝御許：おもと）神社の麓に位置し、豪族宇佐氏の磐座信仰が当初の形態だと言われている。

地主神に、豊の国から移住してきた、秦一族の八幡神信仰が合祀されたとの説がある。隼人の反乱(700,720)は、神仏習合を進める大和系の大神(おおみわ)一族と、大和系に支配されるのを嫌って日向や大隅に移り住んだ秦一族による勢力争いに端を発したものと考えられている。



■宇佐神宮配置図　宇佐神宮小冊子より抜粋

■宇佐神宮神池　菱形池

年代⇒	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀
王権祭祀 時代区分 在位天皇名	崇神･仲哀期		応神･案康期	雄略･宣化期	欽明･光仁期	
沖ノ島の 祭祀形態			岩上祭祀 大量の鏡	岩陰祭祀 イワクラ急増	半岩陰・ 半露天祭祀	露天祭祀
山ノ神 祭祀遺跡	山ノ神		前期	後期	辺津ｲﾜｸﾗ	
			三種の神器 （鏡・剣・玉）	土製摸造品（農機具のミニチュア）		
奥垣内 祭祀遺跡			奥垣内	中津ｲﾜｸﾗ		
	纒向王権 太陽光祭祀			滑石製摸造品 土製摸造品		
三輪山 ｲﾜｸﾗ群の 段階的成立	奥津ｲﾜｸﾗ		河内王権 太陽光祭祀	古代太陽光祭祀の終焉		
			辺津ｲﾜｸﾗ	伊勢遷宮 大神族の農耕神祭祀		
三つの ｲﾜｸﾗ思想の 成長	倭笠縫邑 檜原神社 （日原社）			中津ｲﾜｸﾗ ｲﾜｸﾗ急増	○大神祭のはじまり 禁足地での一括祭祀⇒	
				○伊勢遷宮	三つのｲﾜｸﾗ思想の成長	
神の観念の 変遷	太陽神			人格神⇒		
				記紀の神々の登場 古事記７１２年○ 日本書紀７２０年○		
社殿神道の 発展				○社殿のはじまり６世紀後半 律令官社制７世紀末○ 宗像大社三神合祀７８１年○ （三つのイワクラ思想の成立）		
年代⇒	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀

■宗像大社と三輪山における磐座祭祀と神の概念の変遷
三輪山　イワクラ群の段階的成立＜沖ノ島と三輪山の時系列比較＞
イワクラ(磐座)学会　会報11号　より抜粋

□仏教の伝来と神の概念の変遷

元来、宗像大社(福岡県)や大神神社(奈良県)などは、自然信仰から発生した。
しかし、五世紀半ばの仏教の伝来とともに、次第に神話に登場する人格神を祀り、伊勢神宮を始めとして、社殿が創建されるようになる。これは、大和朝廷を中心とする、大神一族による仏教という新しい偶像崇拝、および神仏習合の影響と見られる。

□阿智神社　磐座と磐境　蓬莱思想への移行

応神朝に朝鮮半島より渡ってきた漢の霊帝の曾孫、阿知使主（あちのおみ）一族。
「石」「鉄」「織」等の先進文化を担う技術集団として、吉備国の繁栄の礎を築き、当時、島（亀島）であったこの鶴形山に神々の天降られる斎場として、日本最古の蓬莱様式の古代庭園を造ったと伝えられている。

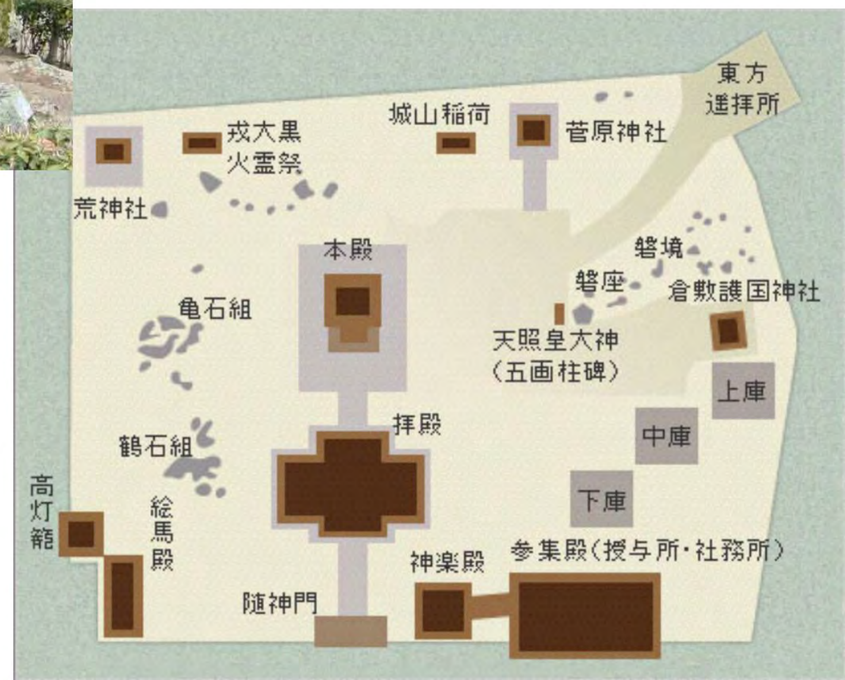
祭神の宗像三女神は、皇祖神、天照大御神と素盞嗚尊の娘神で、海の守護神であり、交通交易、財宝、芸術、美の神でもある。その他、応神天皇を始め、約三十柱の神々をお祀りしている。 また山には神々をお斎りする磐坐（いわくら）が点在し、古代から神の島として崇められてきたと思われる。

■鶴石組
日本へ神仙蓬莱思想が輸入されたのは飛鳥時代とされる。

中国の三神仙思想は仙人が住む山や海島のうち代表的なもの(蓬莱・方丈・瀛(エイ)州など)をさす。

鶴亀蓬莱庭園は、漢の武帝(前156～前87)が生み出したとされ、唐の時代にこれが日本に伝搬した。

■社殿配置図
社殿に向かって右手に磐座や磐境、左手に鶴亀石組が配される。かつては、この鶴形山はかつては島だったと考えられ、祭神が宗像大社や宇佐と同一な点が興味深い。



■東三条殿模型

■平等院鳳凰堂

□南庭　儀式の場　空間の矮小化

法隆寺、四天王寺、興福寺など、それ以前の築地廊で閉じられた回廊とは異なり、東三条殿南側は開いて、極楽浄土を表す池泉舟遊式庭園に面している。

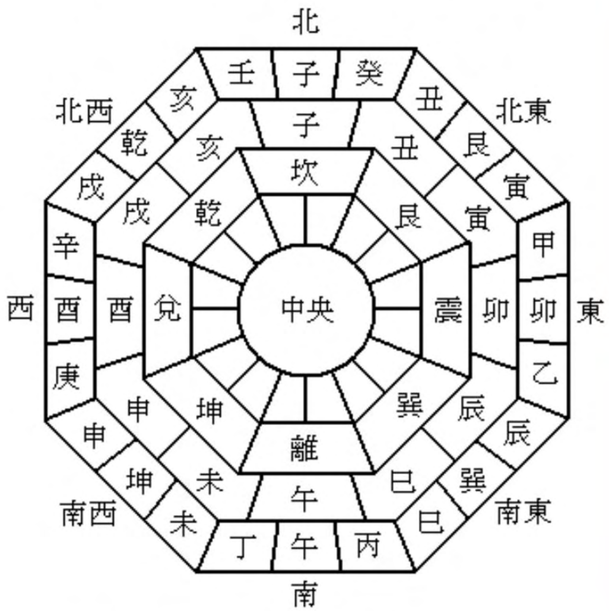
建築の彫塑的要素が薄れ、絵画的に移行していくこの変化は、儀式のために、回廊内に人が入り込んだことが要因とされる。南庭は、主建築の南側に配置された儀式の場であり、南側である理由については、「作庭記」の一節からも知ることができる。

南庭ををく事は、階隠の外のハしらより、池の汀にいたるまで六七丈、若内裏儀式ならば、八九丈にもをよぶべし。礼拝事用意あるべきゆへ也。(作庭記)

□四神相応　「四神＝山川道澤」と方位

四神とは中国神話に登場する、世界の四方向を守る聖獣である。 東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武といい、それぞれ川、海、道、山などに対応。北に山、南に海ということは、日当たり・風通しの良い地形ということである。これにより、寒い北風を山で防ぎながら。南の暖気を最大限に取り入れることができる。東に川、西に道ということは、東へ低くなっている地形である。かくて雨水は川の方へ流れ（水害を回避）、西日の当たる道路は地盤が固くなる（交通振動が軽減）。前者の条件（南傾斜）は「晋土（しんど）」、後者の条件（東くだり）は「魯土（ろど）」といって、どちらも吉相。

鬼門が日本で恐れられるようになったのは、平安朝頃である。平安京では造都にあたり、都の鬼門鎮護のために比叡山延暦寺が作られた。ところが平安朝以前の時代には、日本では東北（＝鬼門）ではなく、西北＝乾の方位が恐れられていた。不思議なことに鬼門が全盛であった江戸時代にも、「巽張り出し、乾倉」といって、西北には倉を作り、東南に張り出しをつくることが家運上昇の吉相とされていた。



■四方の図

■四神相応の図

□庭の変貌

作庭記は、平安末期に書かれ、寝殿造りの庭を主な対象にしていた。しかし、時代とともに庭に関する新たな思想が、中国を通して入り込み、また武士等の新たな階級が生まれたことで、その性質が変貌を遂げる。

・祖神のための祭祀空間から、思想的な世界観を表現する空間へ。
・次第に敷地が狭くなり、池泉舟遊式→池泉回遊式→池泉座観式へと矮小化。
・敷畳と武家社会のさぶらふ(従属する)座敷中心の生活の変化
・行事の室内化や座禅など、禅の修行と相まって座観式が普及
・「動の庭」から「静の庭」へと移行

□庭園と幾何学

620年ごろ蘇我馬子が邸宅敷地に方形の池を設ける。平坦な広場として実用的に使われていた「庭」に小池を掘り、小島を築いて観賞の対象としての「庭園」が造られた。馬子は「嶋大臣」と呼ばれ、この庭園が珍しく、評判になったようである。しかしながら、三角池、菱形池など幾何学名称を持つ庭は、これでしばらく途絶える。

・幾何学は鳴りを潜め、いかに自然景観を上手く写し取るかに主眼が移る

□庭園に用いられた思想

蓬莱思想
・飛鳥時代頃～　秦の始皇帝ー漢の武帝を経て日本へ
・中国の三神仙思想、蓬莱・方丈・瀛(エイ)州など、仙人の住む神仙
・渤海湾に面した山東半島のはるか東方の海にあるとされる
・不老不死や永遠の繁栄の意

須弥山思想
・推古天皇～　インドの仏教思想での宇宙観。七山と四島よりなる
・推古天皇は、宮の南に須弥山と呉橋のある庭を持っていた。
・斉明天皇の宮では、612年百済の帰化人が皇居南庭石上の池畔に須弥山と呉橋を築いたとされる。

浄土思想
・7世紀前半に浄土教（浄土思想）が伝えられた
・9世紀前半に円仁(794年～864)が比叡山に伝える。
・三尊石組　以下のような三尊に見立てた石組
　不動三尊　：不動明王、金伽羅（こんがら）、制た迦（せいたか）童子
　阿弥陀三尊：阿弥陀如来、観音・勢至菩薩
　釈迦三尊　：釈迦如来、文殊・普賢菩薩
　薬師三尊　：薬師如来、日光、月光菩薩

■須弥山の図「天文図解」より

■智積院庭

■慈照寺東求堂　同仁斎

■大徳寺大仙院

■妙心寺退蔵院　元信の庭

□枯山水の誕生　前期式枯山水

池泉式の縮小化と、入れ替わるように増加したのが枯山水である。

かつての細川勝元は、野寺の旧地に龍安寺を草創して、妙心義天を請じた。当時、盤若道人鉄船は、義天の高足としてこれに参画したが、意の合わぬものがあって帰り、市隠斎を設けて退隠し、これに仮山を設けて自ら楽しみとした。文明九年に完成したこの仮山は、鉄船禅師自ら作るところの小庭であって、これを「仮山水」と記している。これには本格的な池泉式の庭園ではない、間に合わせの意味があったと、重森三玲はその著「枯山水」で記している。

・鹿苑寺の龍門瀑や天龍寺の龍門瀑、西芳寺の上部庭園など
・前形式である池泉式庭園の一部分に限定されている
・絵画的／平面的な印象が強い
・倭絵(やまとえ)大和絵的、自然主義的、写実的
・「聖の

□枯山水の席巻　応仁の乱と後期式枯山水　全方向パノラマ化

応仁の乱で焦土と化した市中の再建において、莫大な資金を必要とする池泉式の庭園よりも手軽でありながら、禅の精神世界と上手く折り合う枯山水が、禅宗寺院の新たな作庭様式として採用されたのは、ごく自然なことであった。

・龍安寺石庭、大仙院、聚光院大徳寺方丈など
・南庭など作ってはならなかった場所が反対に利用された
・彫塑的／立面的な印象が強い
・北宋水墨山水画、自然主義的、象徴的、幽玄的

□剰水残山ー庭のフレーミング

剰水残山とは、剰余の水、残余の山という意味で、これは大自然の美に接した場合といえども、誠に大自然美としてのものはその一部にすぎないし、「自己の最も感興に入った美のみを取りきたって山水を組み立てること」である。それゆえ、禅的象徴主義としての剰水残山の思想では、一をもって十を略し、全体の構成美を特色ある最も美と考えられるものによってみ表現されることであるから、それはいきおい一を持って十を象徴するのにほかならない。

□茶庭の誕生　「動の庭」の復権

「動の庭」であった池泉式の庭園は、「静の庭」へと、絵画的で平面的な形態へと向かい、次第にその動きを止める。しかしながら、鎌倉期に出現した枯山水は、南宋絵画などを下敷きにし、かつての「静の庭」は、パノラマや俯瞰という、座観しながらも視覚的な運動を促す新たな手法を取り込むことで、立体化する過程をたどる。こうして庭は、新たな方向へと向かう。

やがて「静の庭」の外に身を置いていた鑑賞者は、庭の中へ引き入られることとなる。その結果生まれたのが、茶庭の空間である。戦国時代という動乱の時代に花開いた茶の湯の文化。単に市中山居という深山の風情を取り込んだだけでなく、その中を歩き伝うことが、彫塑的／立体的な構成を押し進めていく。

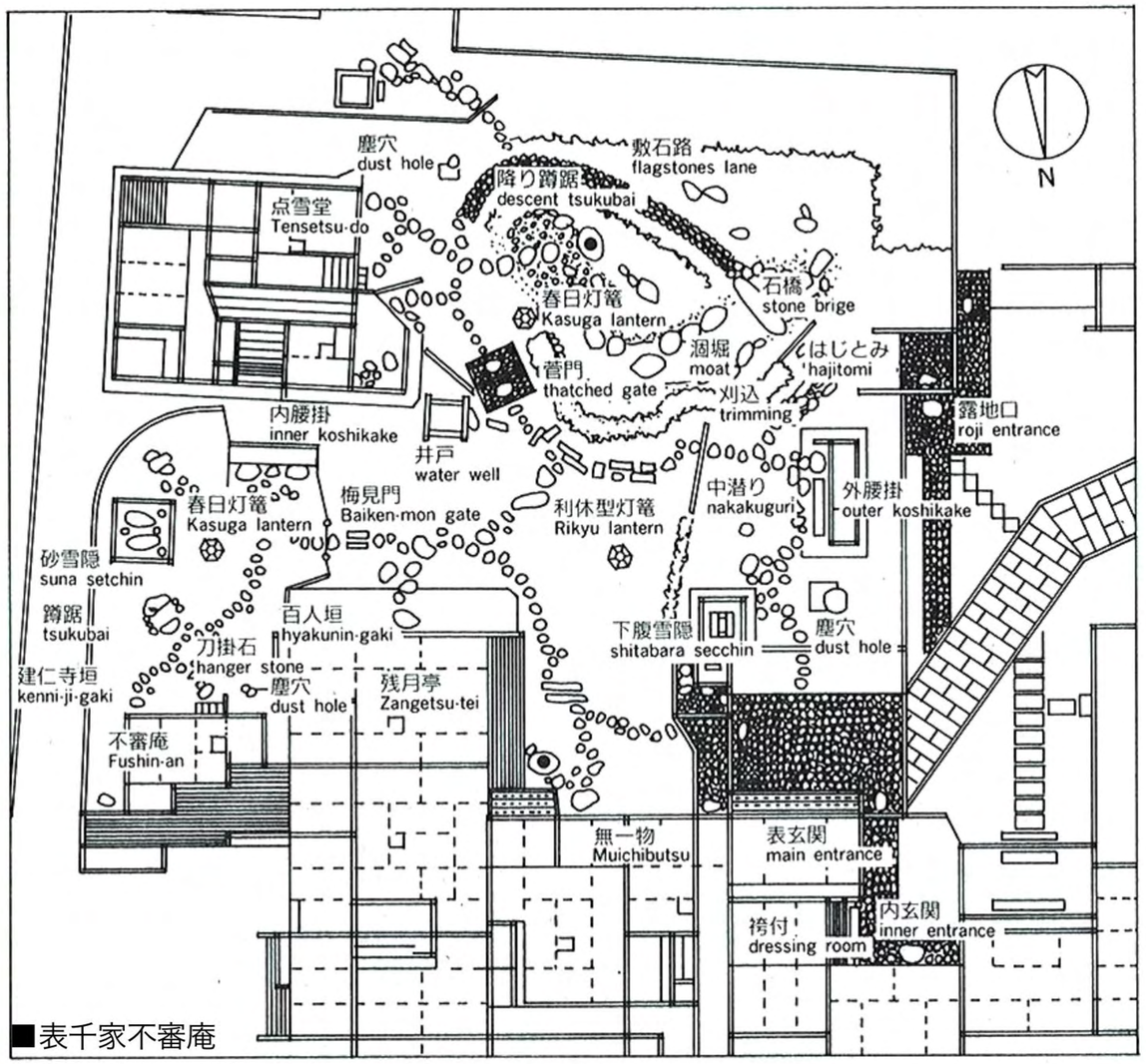
□「争出火宅。安穏得出。露地而坐」　物塵を去った清浄の天地

「露地の趣は野路の趣」という言葉がある。これは、深山風情にするためにあれこれと技巧を凝らすのではなく、山野自生の趣を主とすることを指す。また、用と景のバランスに関して、利休においては六対四、織部においては四対六としているが、市中山居を体現するのに、「あくまでも自然に」ということが基本である。

□内部と外部をつなぐ　原寸の庭

露地は、それまでの座観式庭園にある、内部と外部の明確な境界線を、茶事という活動によって横断するように仕組まれている。しかも、池泉式や枯山水のような「見立て」と違い、実際にその中に身を置くことが、視線や体の動きにリアリティーを与える点で、それまでの庭とは一線を画す。

■表千家不審庵露地



■表千家不審庵

□庭と幾何学　庭の即物化

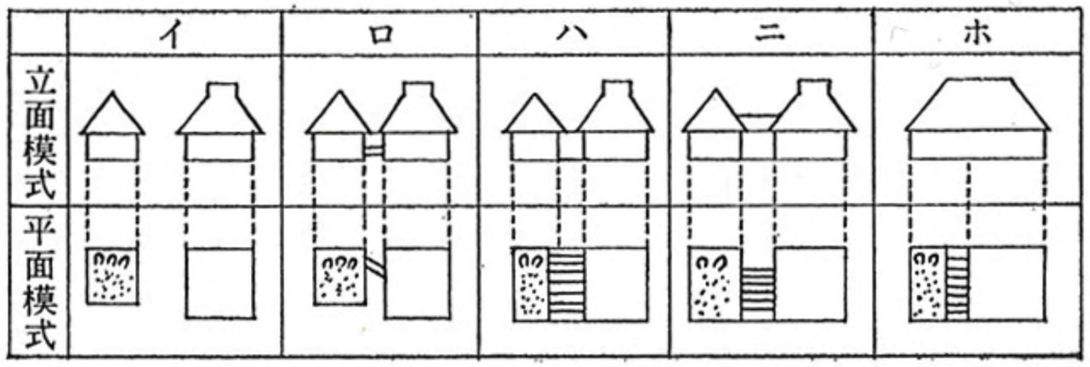
茶庭の出現によって、「静の庭」から「動の庭」への展開を見せた庭園であるが、江戸初期から茶庭の要素が、庭全体に広がる。混在一体となって行く課程の中で、飛鳥時代より途絶えていた幾何学庭園が、小堀遠州の手によって再出現する。借景庭園は、従来の御神山や、祭祀の対象としてではなく、景観そのものを庭に取り込むようになる。マニュアル化と、江戸後期の作庭指南本の出版も相次ぎ、古来庭が持っていた思想的な背景は失われていった。

■頼久寺

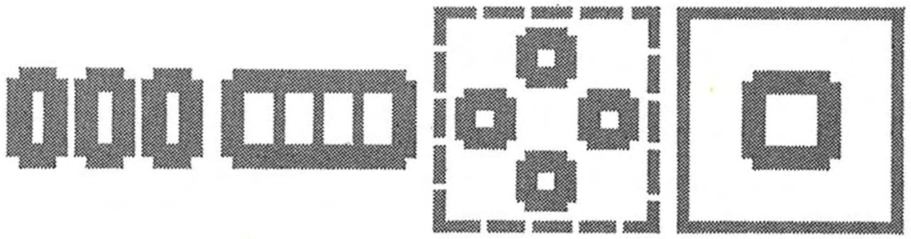
■東福寺方丈

■大徳寺　孤篷庵

■円通寺



二棟建の分類



■住宅の類型　まちや　ながや　のおか　ていたく

■吉田家恵方棚

□オモテとカマヤ　二つのヒエラルキー

住宅のルーツは、もともと食物の貯蔵と五穀豊穣を祈念するための「床」を持つ「オモテ」(上の家)と、日常の作業を行う「土間」を持つカマヤ(下の家)の二つの建物に由来する。

この二つは、「神を祀る清浄なイエ」と「人間の生活を支える不浄のコヤ」という、床の高さが異なる二つのヒエラルキーを内包していた。

これらは時代の変遷とともに、一続きの棟に変化して、邸宅や農家、長屋や町家へと変化していったと考えられている。

□壁によらない滲む境界

和辻哲郎は、「風土」のなかで、「日本の内と外の境は『家』によって規定されている」と述べている。それに対して、西洋ではその境界が「個室」だという。つまり、内と外は壁によって物理的に分割された空間によって規定されるのではなくて、「家」という観念上の境界線によって規定されているのである。

「家」という考え方で規定される境界には、常に幅や曖昧さが伴う。隣家の櫻を自分の庭に取り込んだり、比叡山を借景する、カド掃きは家の境から一尺程度など、生活の中でそうした場面に出くわすことも少なくない。

□自然に対する諦観

和辻哲郎は、同じく「風土」の中で、モンスーン気候に属する日本人の、自然に対する気質として潔くあきらめる国民性を指摘している。刻々と変化する自然を相手に、調子の早い移り変わりにあわせるがゆえに、疲れやすく、持久性を持たない。その疲労を癒すのに、新たな刺激や気分の転換を必要する。

つまり、そうした変化を敏感に感じ取る為にも、家屋が刺激を受けやすい、襖や障子といった、簡素なしきりである必要がある。

光を通す障子や、音を通す襖、夏の建具替えで使われる葭戸などは、そうした簡素な仕切である必要があったと考えられる。

■御所藤壷

■吉田店より前栽を見通す

□庭とは全く異なる「壷」から発生した空間

「藤壷」や「桐壺」など、御所の内部にある「壷」と呼ばれる空間は、いわゆる庭とは全く異なる。これは単に「囲まれた空間」ということのみをさす。「壷」には、それが面した室名が付けられ、「台所壷」などと呼ばれているに過ぎなかった。

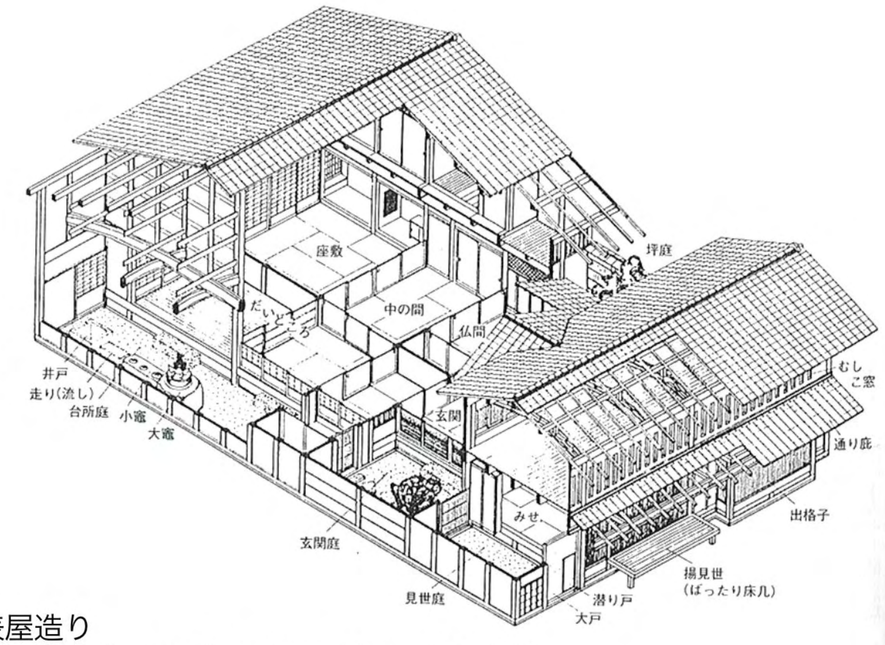
□通風と採光、排水を担う機能的な空間

住んでいる者にとっては、「壷」は先の庭園のような祭祀や思想を表現する空間ではなく、徹底的に機能的な空間であった。つまり、これまでの庭とは違い、自然を景観としてではなく、気温や湿度、採光などの物理的機能を持つ必要があった。

□「壷」から発生した「壷庭」

町家にある「壷庭」は、その意味では生活上必要な装置である。例えば、「鰻の寝床」といわれる間口に対して奥行きが長い敷地の場合、部屋を連ねれば、その真ん中に、「無窓の暗い」部屋が生まれる。それを避ける為に、建物を二つに分割して、間に壷庭を配置したのが、表屋造りといわれる町家の典型的な形である。町家は、建物を支える両側の壁以外は、壁が設けられることは少ない。これは、通りから座敷前の前栽まで、通風を遮ることが無いようにした結果である。

これは先にも述べた、仕切りが簡素なこととも関係している。



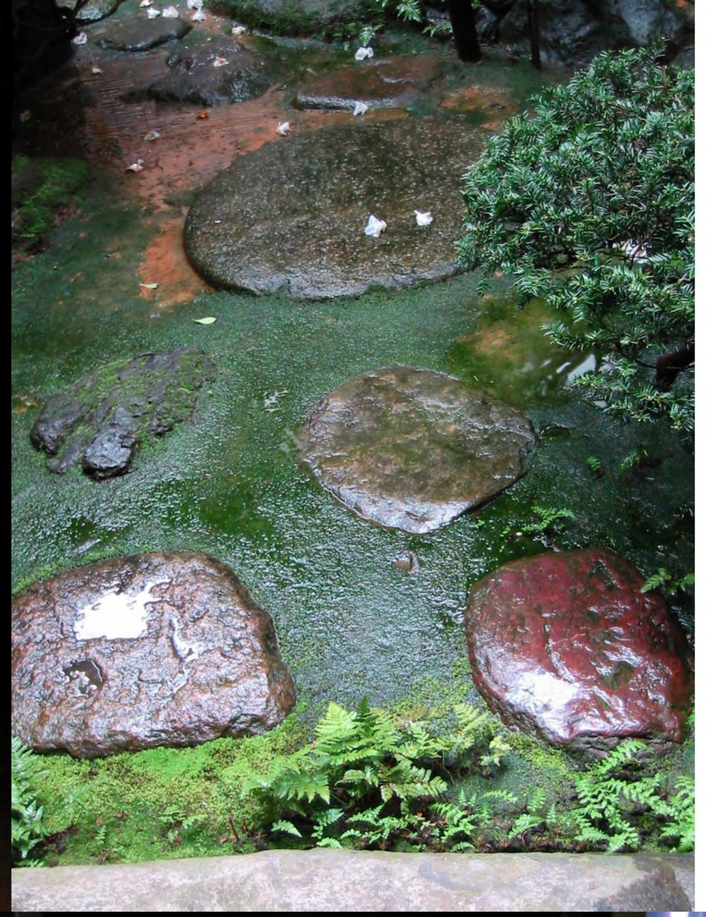
■表屋造り
「京都建築マップ　TOTO出版　より抜粋

■左上　吉田家夏の室礼
籐筵に葭の御簾。風に揺れる姿が涼を与える。

■右上　大徳寺孤篷庵
障子の下部は吹きさらし。額縁のような効果を与える。天井は胡粉を塗られ、夕刻はほの明るい。

■山紫水明処
東山を借景とする。祭祀の対象ではなく、景観として取り込むところは、それまでの庭とは異なる。

■松花堂
二畳の方丈。小さな庵であればあるほど、まわりの自然に敏感になる。かつては、淀川一帯が見渡せる絶景に位置していた。



■左上　吉田家壷庭
壷庭上部から光が降り注ぐ。極楽のあまり風に、棕櫚竹が揺れる。

■右上　打ち水した前栽
打ち水は、風を起こす効果と、見ために涼を得られる効果とがある。

■下左　吉田家竈
正月用の餅米を蒸す。走り庭を照らす竈の火と、立ち上る湯気。

■下中左　わらじや
谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」に出てくる「わらじや」の部屋。

■下中右　夏の室礼
葭戸を通して入るわずかな光で、部屋はほの暗く、涼を呼ぶ。

■下右　走り庭
吹抜けを火袋と呼び、煙や熱気をためる場所として機能している。